

物凄い大劇副で伊藤大輔氏が脚色に監督に徹頭徹尾、興行價値を狙つて作り上げた映畫であつた。そうして氏の狙つた點は申し分なく成功して居る映畫である。然しそれはしないければ成らぬもので、外國活劇映畫の模倣なのであるけれどもさすが伊藤氏だ、その模倣が聞がれ抜けて居ない。だから活劇場に瞬間に撮影を猛烈に使って、観客に息もつかせない所なぞが駆服するに値するものである。又ラストの別れも少し長すぎたが餘韻があつる程の好い。併せ演じる各役者の大隨臭は勿論あるが活劇の場面に於ける各の出し物は喜氏の撮影も活劇風分ないやが上に高調せしもの點で大いに氏の力もある所が多い。因に映畫は多少國際的に觸れる云ふ點で優れた映畫の際には何等碌りばもなく返つて冗長さが少々嫌いに思はれる。(七月廿七日、大阪芦原劇場封切)

二六三